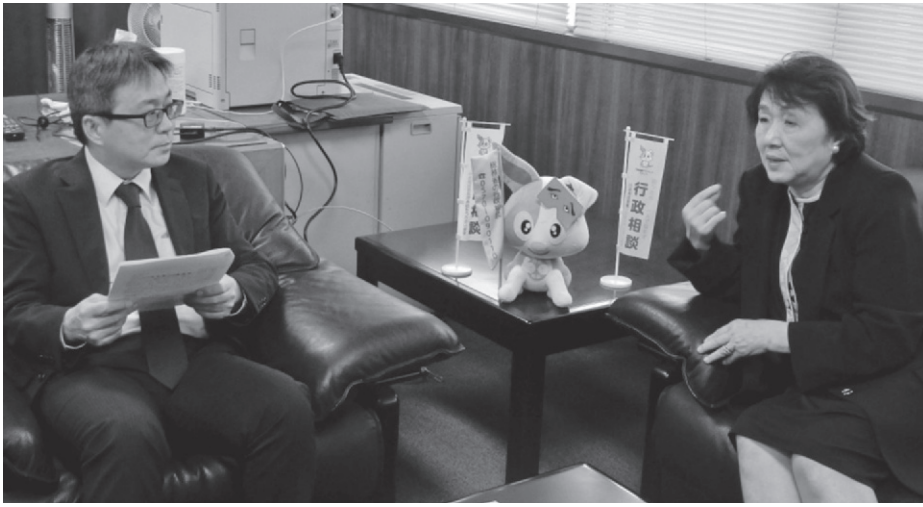


会長 大いに語る

オール・オブ・ミー (All of Me)

「語る人」福岡行政相談委員協議会会長 西原眞理子 氏
「聞く人」九州管区行政評価局長 安仲 陽一 氏



対談風景 (局長室)

局長 昭和36年の行政相談委員制度発足から65年、時代も昭和、平成を経て令和に突入し、人々の価値観も多様化、社会、経済の変化も速くなってまいりました。本日は、そうした変化の中で、第一線で活躍され、昨年の叙勲で勲章を受章された福岡行政相談委員協議会の会長である西原眞理子委員(飯塚市担当)に、連載復活第一弾として、大いに語っていただきたいと思えます。よろしくお願ひいたします。

会長 よろしくお願ひします。

西原眞理子の原点

局長 まず、会長の人となりを可視化していきたいのですが、ご出身はどちらですか。

会長 生まれまされたのは久留米(福岡県)ですが、父親の転勤で、田川(福岡県)、

八代(熊本県)、日田(大分県)と転々といまして、中学から高校までは福岡、東京の大学に進学しまして、卒業後に福岡に戻り、結婚してから、今の飯塚に移り住みました。

局長 確か歯科医師をされていたとお聞きしましたが。

会長 ええ、高校では数学は得意な方でしたけど、特に理系の学部に進学しようという意識もなかったのですけれど、あなたは当然理系でしょと母親に押し切れ、化学とか生物などを勉強する羽目になりました。大学の歯学部を卒業して歯科医の資格を取得し、そのまま東京で働こうと考えていましたが、父親に福岡に戻るよう強いわれました、福岡に戻って歯科勤務をしていました。

局長 そこでご主人と出会われて、ご主人の地元である飯塚市に移住されたのですか。
会長 知り合いの紹介で、当時、大病病

院に内科医として勤務していた主人と出会って、途中で、主人の仕事の関係で、アメリカのヒューストン(テキサス州)で2年間暮らしました。その後、福岡に戻りましたが、主人が大学には残らない、地元飯塚に戻って地域医療に貢献したいと、地元の飯塚病院勤務を経て、平成3年にクリニックを開業しました。

局長 海外にも行かれていたのですか。アメリカでの生活はいかがでしたか。

会長 昭和60年から2年間暮らしましたが、渡米当時は1ドル250円程度でしたから渡航費用を捻出、準備するの大変でした(注・昭和60年のプラザ合意によるドル安政策により昭和61年当時は円高が進み168円台となっている)。

あちらでは医療関係の友人ができました、とてもきちんとした方で、あちらこちら連れて行っていただきましたし、料理のレシビなどもタイプライターで打ってくれたりして、いろいろ教えていただいて、大変お世話になりました。

また、コミュニティ社会なので、勧められて教会にも通いました。たまたま日本ではミッシェンスクールに通っていて、聖書も読んでいましたから、それほど違和感なく入ることができました。

局長 お子さんたちは、日本人学校に通われていたのですか、それとも、現地の

学校ですか。

会長 3歳と5歳でしたから、プリスクール(Preschool)とキンダーガーテン(Kindergarten)でした。

局長 2年の海外生活を経て、福岡に戻り、さらに2年後に人口100万人超の福岡市から当時人口14万人ほどの飯塚市への移住ですが、生活する中でギャップは感じませんでしたか。

会長 移住当初、主人は地元の飯塚病院で勤務したのですが、宿舍のマンションが満室でしたので、築100年の二軒長屋で1年間暮らすことになりました。さすがにあちこち傷んでいて、すき間も空いていて、廊下から地面が見えるわ、風は入るわ、雪が降ったら廊下に斜めに積もるわ、それはもう大変でした。トイレも当然、くみ取り式の和式でしたから、福岡のマンション住まいとはものすごい格差でしたね(笑)。

局長 何度かお目にかかって、私もそうですが、職員に聞きましたも、会長はいつも忙しそうに走り回っていますよね。何か頼まれても嫌とは言えないのか、言わないのか、そういう性格とお見受けしますし、加速度的に多忙が積み重なって、忙しいことが日常茶飯事なのではないか、でも、その忙しさをとても楽しんでるような心証を持つのですが。

会長 福岡に住んでいた頃、知り合いから勧められて、福岡にも支部のあった全国友の会(注)に参加しました。

「良い家庭から良い社会をつくる」、「よく教育するとは、よく生活させること」といった羽仁もと子さんの言葉があって、衣・食・住・家計・子育てなどの生活全般を整えて社会に貢献する、社会で働く人になるよう努力するということを学びました。例えば、魚は当然捌きますし、食事は全て手作りでした。また、子どもを週1回、幼稚園に通わせていましたけれど、お弁当は当然ですが、通園服から、バッグまで身に着けるものは全て手作りするようになって、歯科医院でアルバイトしながらやっていくのはそれももう大変でしたけれど、隣人の協力もありましたし、せっかくなので楽しめないと言わないですか。何事もできるだけ楽しむようにしています。第三子懐妊で、歯科医は、きっぱり諦めました。

(注)女性ジャーナリスト羽仁もと子氏が創刊した雑誌「婦人之友」の愛読者によって生まれた生活共同学習団体。「生活から学び、家庭を整え、それを社会へ広げる」という考えを大切に、暮らし全般を年代を越えて学び合う活動を全国で展開

局長 なるほど、そこが会長の原点なのです。

局長 ご自身で考えて行動されていく会長の「行動力」、「実行力」には敬服するばかりです。



小学校での出前教室(飯塚市立庄内小学校・令和7年6月)

記憶に残る相談事例

局長 行政相談課の職員から、会長は、相談者の話を丁寧に聞き取ることを常に心がけておられ、相談内容を的確に把握された上で適切に助言を行っておられる、必要ならば、出向いて現地確認も行って、法令上の扱いも確認を怠らないので、相談者からも厚い信頼を得ている、と聞き及んでいます。これまで扱った事案

で、相談者から感謝された例を一つ、二つ、ご紹介ください。

会長 それは買いかぶりすぎですよ。感謝されたということでは、2つほど思い出すものがあります。

一つは、自動車学校近くの生活道路の路面に凹凸があつて、通行しづらい、特に雨の日は水たまりができて、歩行者が歩けるスペースが限られてしまう上に、運転に慣れていない教習車もよく通るので危ない、という相談を受けました。

そこは市道でしたので、担当の土木管理課に相談の内容を説明しまして、何か対策ができないか検討をお願いしました。後日、路面のくぼんでいる箇所を補修する工事が無事に行われましたところ、相談者から大変感謝されたと記憶しています。

もう一つは、火事に遭われた方から、生活も困窮して障害もあるので、県営住宅のできれば1階に住みたい、という相談がありました。この方は、もともと社会福祉協議会が実施している心配ごと相談を利用されたのですが、対応した民生委員の方がこのような内容であれば行政相談委員にも相談した方がいいとの助言があり、私も対応することになりました。

福岡県の住宅供給公社に事情を説明するなどして、ご希望どおり1階に住める

ことになったのですが、その過程で、行政相談委員と民生委員、社会福祉協議会、飯塚市の福祉部門、福岡県の住宅供給公社がチームになってこの方の生活支援のお手伝いをするような形になり、様々な専門分野を持つ方々との横の連携が大切だということと、こういった方々に行政相談というものを知っていただくことが必要だと認識を新たにいたしました。

委員歴30年、女性委員への想い

局長 行政相談委員に就任されてから29年。いよいよ30年目に突入したわけですが、ここまで長く委員を続けることができたのは何か秘訣があるのでしようか。

会長 私が行政相談委員に就任した当時、福岡地相協に女性委員会がありました、その会長だった丸山美恵子委員に鍛えられました。当時、女性委員の割合が20%くらいだったでしょうか、これを30%から35%まで引き上げようと10年以上にわたり活動しました。丸山会長に連れられて各地で開催する講演会とか研修会に参加しました。当時、パソコンがまだ普及しはじめたばかりの頃で、扱える方も少なかったもので、パワーポイントで資料を作成したりもしましたし、機関誌「那津」(なのつ)を年1回作成したりも

していました。機関誌は結構な厚みがあつて、内容の企画や原稿依頼など大変だったことを記憶しています。女性委員会のロビー活動で霞が関の総務省本省にも何度か訪問させていただきましたし、博多駅前の博多都ホテルで女性委員会設立10周年記念式典も開催しました。式典の準備は大変でしたけれど、かなり盛り上がりまして、無事に終えたときは、これまででない達成感がありました。



福岡地相協女性委員会設立10周年記念誌
「那津とともに」

こうした就任して最初の頃の経験がなければ、ここまで行政相談委員を続けることはできなかつたのではないかなと思います。

そして、委員を続けているうちに、飯塚市の情報公開審査会や個人情報保護審査会の委員、福岡家庭裁判所飯塚支部で調停委員などお誘いを受け、管区の行

政苦情救済推進会議（現行政改善推進会議）にも参加させていただいて、ますます辞められなくなりました（笑）。

局長 私の知る限りでも、女性委員が地相協会長に就かれているところも増えてきましたね。女性委員会に参加されていた西原委員が、今こうしてまさに会長職に就かれていること一つをとってみても、女性委員会の活動の意義は大いにあつたといえるのではないのでしょうか。

会長 女性委員会で活動している当時、地相協の会長は男性委員ばかりでしたからね。でも、いま全相協の監事をさせていただいていますけれど、全相協の役員で女性は私一人なので、女性役員を一人でも多く増やしていきたいといけないと感じています。

先日、叙勲の伝達式で上京した際、受章された地相協会長の女性委員とお会いして、今度、女性委員だけで集まる会をしましょう、なんて話もしましたよ。

地相協会長として、 勲章を受章して

局長 平成18年5月に福岡地相協の理事に就任され、21年5月からは副会長として、令和3年5月からは会長として福岡地相協を牽引されていますが、ご苦労さ

れていることはありますか。

会長 地相協、広相協の役員として理事会や総会、自主研修会などの会合や行事にあたる一方で、令和5年6月から全相協の監事もさせていただいていますので、毎年3月から6月は毎月上京しております。忙しくさせてもらっています。でも、他の役員の方も協力的ですし、管区の職員の方々にも支えられ助けられています。特に、小島幸江委員（糸島市担当。前福岡地相協事務局長）とは、女性委員会の頃から、二人で愚痴をこぼしながらも、ずっと一緒にやってきました。昨年9月に計報に接したときは単なる知り合いが亡くなったということでは片付けることはできませんで、右腕をのがれたような痛みがありました。

局長 昨春秋、行政相談委員としてのこれまでのご功労が評価され、勲章（瑞宝双光章）を受章されました。改めましておめでとうございます。昨年11月、東京での伝達式に臨まれ、皇居で陛下ともお会いされたとお聞きしていますが、受章されてのお気持ち、皇居、陛下の印象などお聞かせください。

会長 勲章の受章は大変びっくりいたしました。そんな大きなこともしてないのに、と思うところが大きいですが、本当にありがとうございます。飯塚市

長にご報告させていただいた機会に局長もご覧になられたと思いますけれど、叙勲の証書(注：勲記)に初の女性総理となられた高市早苗の署名が入っておりまして、とても感慨深く思います。

伝達式、皇居には、同伴可ということでしたので、主人は普段は行かないと言うのですけれど、なぜか今回は「俺も行く」と言いまして(笑)、二人で行かせていただきました。

皇居では、陛下が御挨拶された後、前列の4人の方に、どんなお仕事をなされたのですか、ご苦労様でしたね、などと語りかけておられて、その雰囲気は本当に和やかで、心が温まるように感じました。

もう一つ印象的だったのは、大広間の壁にオレンジ色の雲があつて、陛下が入室されるときに木戸が開けられるのですが、その際にゴロゴロと大きな音がしたのですけれど、オレンジの雲とゴロゴロという音、そして天皇陛下の入室が見事に調和していたのが忘れられません。

局長 ご近所、周囲の反応はどうでしたか。

会長 自宅に花が届けられたり、電話をいただいたり、歩いていましたら「おめでとうございます」と声を掛けられたりもしまして、私からお伝えしていない

にびつくりしました。

局長 受章された前と後で、委員としての活動に変化はありますか。

会長 いつまでも浮かれている場合ではないと自戒しまして、受章の喜びは1月まで、と自分に言い聞かせておりました。その後は、至って普段どおりです。

これからの行政相談

局長 いよいよ紙幅も尽きてまいりましたが、最後に、これからの行政相談についてメッセージをいただければ幸いです。

会長 いま相談におみえになる方の大半は高齢の方ですね。若い方は減多にお越しにならないと思います。2月に管区で開催された行政相談委員広域研修に参加させていただいた際、若い委員とお話をする機会がありました。いまの若い方はわざわざ出掛けてまで、時間を掛けてまで相談の窓口には行かない、やはりSNSで情報を集めたりしますから、LINEなども使っていないか、ということをおっしゃっておりました。私も同感で、確かにセキュリティなどの問題もいろいろあると思いますけれど、役所もそうですが、行政相談委員にもSNSとかを使

える方も増やしていくことが大事ではないかなと思います。ご高齢の方々は私たちがしっかりと困りごとをお聞きして手を差し伸べる、皆さんは現役世代に手をも差し伸べ、そんな役割分担も必要なのかもしれません。

局長 貴重なお話を聞かせていただきまして、本日はありがとうございます。引き続きよろしくお願い申し上げます。

対談を終えて (局長のひとり言)

サブタイトルのAll of Meですが、直訳すると「私のすべて」。西原会長と今回の対談を含めて何度かお会いして感じたのは、行政相談委員として、会長としての活動以外にも、複数の役職をこなし、ご家庭のことは無論のこと、ご主人のクリニックの事務もこなすなど、いつも大変お忙しそうにされています。忙しくても頼まれると決して断らず、しかも全力で事に当たる、正に私の全てを捧げる、そんな西原会長の姿を体現した素晴らしい言葉だと思います。